

自他の類似性判断の自動性

澁 谷 覚

はじめに

自分より先に何かを経験した他者の感想や評価を参照しながら、自分がその何かを経験する際の感想や満足度などを予測するという認知的作業を、消費者は日常的に行うようになってきている。今日では、ホテルや飲食店を選ぶとき、何かのサービス等を申し込むとき、新しく何かを購入するときなどに、われわれはごく自然に先行する他者の経験を参照する。しかしいざそれらを自分で経験してみると、たまたま参照した他者と同様の感想をもつか否かは、必ずしも明らかではない。実際に同じ対象を経験しても、他者とは感想や満足度が異なることも多々あるのである。このように先行して何かを経験した他者と、後からこれを経験した自己との間で感想や満足度などが一致するか否かについては、これを規定する要因はさまざまであるが、中でも重要な役割を果たすものとして、他者と自己との間の何らかの共通性または類似性がある。

自他の類似性や類似性判断について扱う代表的な分野として、社会的比較に関する研究をあげることができる。筆者は約10年前に和田充夫教授のご指導を受けながら、この分野において1970年代までに提示されたいくつかの枠組みがインターネット上の自他の類似性判断を捉える上で有用であることに着目し、博士論文を作成した。実はその頃、社会的比較過程の研究分野においては、従来とは異なるアプローチにもとづく新たな研究が次々に提出され

始めており、社会的比較に関する研究は新たな時代に入りつつあったのである（不勉強な筆者がこのような動きに気づいたのは、博士論文を提出した後のことであった）。

具体的には、1990年代半ばから認知科学のパースペクティブを取り入れることによって、社会的比較過程の分野でも新しいアプローチによる研究が行われるようになっていた。中でも1995年に提出された Gilbert らによる2つの実験（Gilbert, Giesler and Morris 1995 の実験1と2）は、社会的比較が本人の意思とは無関係に自動的・無自覚的に行われることを示しており、意図的・自覚的に行われると考えられてきた従来の社会的比較のイメージを根底から覆した点で画期的であった。

本稿では、このような新たな動きが見られるようになった時代よりはるかに前の、1970年に提出された Morse と Gergen による著名な実験（Morse and Gergen 1970）をまず取り上げたい。この実験は、自己評価や自己概念が不明確であるときに行われると従来仮定されてきた社会的比較が、それらが特段不明確ではないときにも行われることを示したものとして、しばしば引用される著名な研究であるが、よく知られたこの実験結果に続けて、ある奇妙な実験結果が論文の後半に報告されている。しかしこの部分については従来あまり触れられることがない。本稿では、この部分で述べられた実験結果が示唆する内容について検討し、これを上記の社会的比較過程研究における新たな動きと関連づけて考察することを目的とする。

第I章では古典的な社会的比較過程研究の枠組みを概観し、第II章では Morse と Gergen による実験の手続きと、実験から得られた結果を紹介する。第III章では第II章での検討結果を踏まえて、近年の社会的比較研究の流れに位置づけて考察を行う。

I 社会的比較過程：自己を他者と比較するプロセス

1. 社会的比較過程とは

(1) Festinger による問題提起

人間が自己を他者と比較することによってさまざまな評価や判断を行うプロセス¹⁾について、最初に着目したのは Festinger であった。Festinger は自己と他者とを何らかの観点において比較し、両者間の類似点と非類似点を明らかにしようとするプロセスを「社会的比較過程」と呼んだ。人間は誰でも自己の意見の正しさや能力の程度を評価しようとする動因を有しているが、それらを何らかの客観的または物理的手段によって確認することがむずかしいときには、自己の意見や能力を他者のそれらと比較することによって評価しようすると Festinger は述べている (Festinger 1954)。すなわち自己評価が不明確であるときに、人は他者と自己とを比較するというのが社会的比較過程研究の当初の仮定であった。

(2) 類似性仮説：比較相手としての類似な他者

Festingerによる問題提起の中心的な論旨は、人は社会的比較を行うために自己と類似した他者を選択するということであった (Wilson 1973)。そのため、このような主張を「類似性仮説」と呼ぶことがある (Wheeler and Zuckerman 1977; 高田 1984)。同仮説については、そこで述べられている「類似した他者」とはどのような相手なのかについて、従来さまざまに議論が行われてきた。Wheeler らは「われわれは単に意見が近い誰かを求めるのではなく、その意見の内容に関連する属性において類似性を有しているために、われわれと近い意見をもつはずであるような誰かを求めるのである」と述べている (Wheeler et al. 1969, p. 231)。ただしここで Wheeler らが述べ

1) 社会的比較過程研究が扱う研究対象として、自己と自己の比較、および他者と他者の比較をも含める立場をとる研究者もいるが (例: Kruglanski and Mayseless 1990)、伝統的な社会的比較過程研究では自己と他者との比較についてのみ焦点を当てている (Wood 1996)。

る「われわれと近い意見をもつはずであるような誰か」（強調点は筆者による）とは、意見や能力そのものを取り上げて、その近さを指しているのではない。意見や能力が自分と近い者を探して来て、その者の意見や能力を自分のものと較べても、似ている意見や能力が再確認されるだけであり他にも自分と似た意見や能力の者がいることが分かるという程度の示唆しか得られない。自分の意見や能力を評価するために有益な情報をもたらしてくれそうな他者を比較対象として選択するためには、その意見や能力に関連する何らかの属性において自己と近い他者をわれわれは選ぶ傾向があるというのが、Wheeler らによる解釈の真意であろうと高田は考察している（高田 1981）。実際にこのような他者と比較することによって、われわれは自分の意見や能力を適切に評価することができるのである。なぜなら、意見や能力に関連する何らかの属性において自己と近い他者を探して来て、その者の意見や能力を自分のものと比較すれば、自分の意見が特に偏向したものでないか、あるいは自分の能力が一般的に見て特に劣っていないか、または特に優れているかどうか、等について判断することができるからである。Festinger が述べた「類似した他者」とは、このようなことを意味していたと考えることができる²⁾。

以上のように、この時代の社会的比較過程研究では、社会的比較を能動的に行う主体としての個人に焦点を当てた上で、なぜわれわれが自己と近い他者を比較対象として「選択する」のかを議論してきたのである。

2. 関連属性と二層比較モデル

(1) 関連属性

Wheeler らが述べた「意見の内容に関連する属性」のように、比較したい

2) 比較対象としては、必ずしも類似した他者だけが選ばれるわけではない。（高田 1982）は、自分とかけ離れた他者が比較相手として選択されたことを報告している実証研究も多いことを示している。ただし類似性をテーマとする本稿では、類似性仮説すなわち類似した他者が選択される比較に着目しており、また類似した他者との比較が基本であると考ええる。

内容に関連すると思われる属性のことを社会的比較過程研究の分野では、「関連属性」(Goethals and Nelson 1973; Goethals and Darley 1977)と呼ぶ。この概念を用いると、Festinger によって提起された類似性仮説にいう「類似な他者」には、2つのレベルにおける類似性が含意されていると考えることができる。すなわち比較したい内容そのもの（ここでは意見や能力のこと）に関する類似性と、関連属性における類似性である。そしてわれわれが他者と自己とを比較する際には、まず関連属性において類似性を有する他者を選択した上で、当該他者と自己の意見や能力を比較すると考えるのである。このように関連属性における比較は、「比較過程の基礎部分を構成する」(Patchen 1961, p. 138) きわめて重要な役割を果たしている。高田は、他者と意見や能力などが類似するか否かの判断は、当該他者との関連属性における類似性を前提として機能する（高田 1981, p. 289）と述べている。

（2）二層比較モデル

このように比較したい内容そのものに関する類似性と、関連属性における類似性とを識別する立場を「二層比較モデル」(澁谷 2003)³⁾と呼ぶことにしよう。

二層比較モデルは、意見や能力の比較だけではなく、さまざまな比較に適用可能な枠組みである。例えば賃金について不満があり、他者がどのぐらいの賃金を支給されているのかを知りたいと思っている工場労働者がいるとしよう。このときに彼は単に賃金のみを比較したいのではなく、同じ工場で働く他の労働者のスキルや経験、年齢なども比較したいであろう。そして比較の結果もし自分より経験が浅い他の労働者が自分より高い賃金を得ていれば不満である一方で、自分と年齢が近い他者に較べて自分の賃金が多いことを知れば、自分のスキルが高く評価されていることがわかり満足であろう。すなわち賃金の比較に関しては経験や年齢などが関連属性であり、これらに関

3) ただし(澁谷 2003)では、「二重の比較仮説」と呼んでいる。

する比較が賃金自体の比較と同時に行われているのである。工場労働者の賃金満足度に関する調査を通じて以上のことを明らかにした Patchen は、結論として「あらゆる社会的比較においては、単一ではなく、同時に2つ以上の比較が行われる」(Patchen 1961, p. 138) と述べている。

1970年代から1980年代はじめまでに実施された社会的比較に関する125の実証研究を精査した高田は、これらの研究の多くにおいて「互いに関連した異なる2つの次元における類似性、または比較」という枠組みが前提とされ、あるいは実証的に支持されていると述べている(高田 1982; 1983; 1984)。近年でも二層比較の枠組みを前提とする研究は数多く行われている。例えば Vargas と Loveland の調査では、宗教をもつかどうかという次元と、これに関連する性別や政治的方向性等の次元とが並行して取り上げられており(Vargas and Loveland 2011)、また高校生の交友関係について調査を行った Ueno は、どのような背景特性が性的嗜好性(ゲイカストレートか)を規定するのかという問題意識から、性的嗜好性と関連属性(人種・民族、学業成績等)とを組み合わせで議論している(Ueno 2010)。これらの研究においても、二層比較モデルの枠組みが根底にあると理解することができる。

以上のように要約される古典的な社会的比較研究の枠組みは、1990年代半ば以降の新しいアプローチにもとづく一連の研究により大きな変更を迫られているが、次章ではこのことを四半世紀以上先行して示唆していたと思われる実験について取り上げ、検討する。

II Morse and Gergen の実験

本章と次章では、1970年に行われた Morse と Gergen による実験を検討する。序章に述べたように、この実験は自己評価が不明確な状況でなくても社会的比較が行われることを示した研究として、しばしば引用されるものである。しかし本稿では、この実験において追加的に報告されている結果に着目し、これが示す示唆について議論する。

1. 実験手続き

(1) 実験の概要

実験には、ミシガン大学の学部生78名が被験者として参加した。被験者は実験中に他者（サクラ）と遭遇する。各被験者はこのサクラとの遭遇の前後で自尊心を測定する質問に回答しており、その変化値が従属変数であった。実験は2（他者：清潔／不潔）×2（被験者の自己一貫性：高／低）の被験者間デザインであった。

(2) 実験手続き

この実験では、「パーソナリティ調査」の助手のアルバイトの募集広告をミシガン大学の学内新聞に掲載し、応募してきた学部生78名が実験の被験者となった。被験者が学生課に到着すると、秘書が面接室に案内し、まず「アルバイトの選考とは無関係」と説明されたいくつかの質問に回答することを求めた。これらの質問には、自己一貫性の測定尺度と、自尊心に関する測定尺度の前半の半分が含まれていた。

被験者が回答が終わると、秘書がもう一人の応募者（以後「他者」と呼ぶ）を面接室に案内してきて、被験者と向き合う形でテーブルの反対側の端に座らせた。この他者は実験遂行者が用意したサクラであり、2種類が設定されていた。「清潔条件」の他者（以後「清潔氏」と呼ぶ）はいかにも優秀そうな外見で清潔な身なりであるのに対して、「不潔条件」の他者（以後「不潔氏」と呼ぶ）はいかにもだらしがなく、不潔な身なりであった。被験者は半分が清潔条件、残りの半分が不潔条件に割り当てられた。清潔氏はダークスーツをきちんと着ていて、いかにも自信ありげであり、席に着くやいなヤタツシェケースからきちんと削られたえんぴつを取り出し、すぐさま一心不乱に質問への回答記入を始めた。また彼は統計の参考書、計算尺、哲学の教科書をもっているのが被験者から見えていた。これに対して不潔氏は、汗臭いシャツと所々破れたパンツを着ていて、靴下は履いておらず、ポーっとしていた。彼はよれよれになった『大いなる野望』⁴⁾のペーパーバック版を机に置き、

しばらく周りをぼんやり見回してからえんぴつを探し始め、最後に机の上にあることに気づく。質問への回答記入に取りかかっても、しばしば中断して頭をボリボリ搔き、また面接室の中をぼんやりと見回す、という調子であった。この実験で操作された以上の要因を以後「他者要因」と呼ぶ。すなわち他者要因には清潔条件と不潔条件の2つの水準が設定されたことになる。なお、両条件とも被験者と他者は一言も会話をしなかった。

他者が面接室に入ってきた後に、被験者は秘書が持ってきた別のいくつかの質問にも引き続き回答することを求められる。これには自尊心の測定尺度の後半の半分も含まれており、他者が来る前の自尊心スコアと他者が来た後の自尊心スコアを比較できるようになっていた。つまりこの実験の従属変数は、他者との遭遇前後における被験者の自尊心の変化値であった。また要因としては、先に述べた他者要因（清潔条件／不潔条件）に加えて、被験者の自己一貫性が考慮された。すなわちはじめに被験者が回答した自己一貫性スコアを用いて、上から半分を高_一貫性グループ、下から半分を低_一貫性グループとした。したがってこの実験は、2（他者要因：清潔氏／不潔氏）×2（自己一貫性要因：高／低）の被験者間デザインであり、従属変数は他者に会う前後における被験者の自尊心の変化値であった⁹⁾。

（3）実験結果1

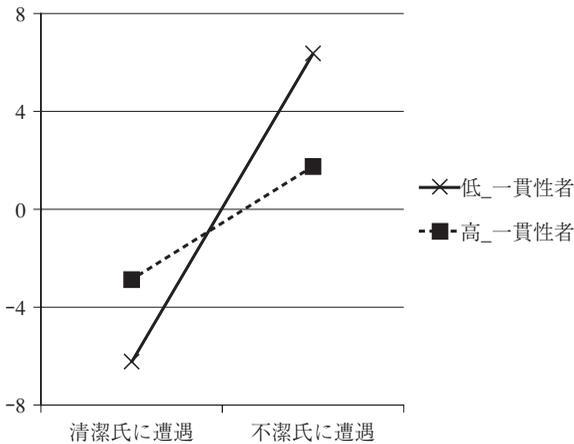
他者要因と被験者の自己一貫性が自尊心の変化値に及ぼした影響については第1図のような結果が得られ、自己一貫性要因と他者要因とが自尊心に及

4) 原題は“The carpetbaggers”であり、ハワード・ヒューズをモデルにして作られた小説。

5) 実際にはこの実験では、さらにもう1つの要因として、他者と被験者がアルバイトの選考において競合する条件（他者が被験者と同じ職種に応募していると思わされる条件）と競合しない条件（異なる職種に応募していると思わされる条件）が設定されていた。MorseとGergenはこの操作により、前者の条件では社会的比較の有用性が高く、後者では低くなる考えた。しかし清潔氏と不潔氏のコントラストがあまりに劇的であったために競合要因の効果が薄まってしまう、操作はうまくいかなかったと述べている（p. 151）。したがってここでは、この実験で操作された3つの要因のうち、他者要因と自己一貫性要因についてのみ検討を行う。

ぼした交互作用効果は有意ではなかった。ただし低_自己一貫性グループでは、清潔氏に会った被験者は自尊心が有意に低下し ($p < .05$)、不潔氏に会った被験者は自尊心が有意に高まった ($p < .05$)。これに対して高_自己一貫性グループでは、清潔氏・不潔氏のいずれに遭遇しても自尊心の有意な変化は見られなかった。つまり自己一貫性が低い被験者は、面接室で出会った他者と自己との社会的比較を行い、その結果として自分よりかなり優秀そうな他者に会った被験者は自尊心を低下させ、自分よりかなり愚鈍そうな他者に会った被験者は自尊心を高めたと推察される。これとは対称的に、自己一貫性が高い被験者の自尊心には統計的に有意な変化は見られなかったものの、やはり清潔氏に会った者は自尊心を低下させ、不潔氏に会った者は自尊心を高める傾向があったと Morse と Gergen は報告している。

第1図 自己一貫性と他者要因が自尊心に及ぼした影響



出所：(Morse and Gergen 1970), p. 152, Table 1 より作成

重要なことは、この実験では被験者の自己一貫性の高低は識別したものの、被験者の自己評価についての何らかの不明確さは特に操作されなかったということである。それにもかかわらず被験者は、面接室で出会った他者との社会的比較を行ったことが第1図より明らかである。このことから、社会的比

較は Festinger らの当初の仮定とは異なり、自己評価が不明確でない状況においても行われる場合があると考えられることができる。

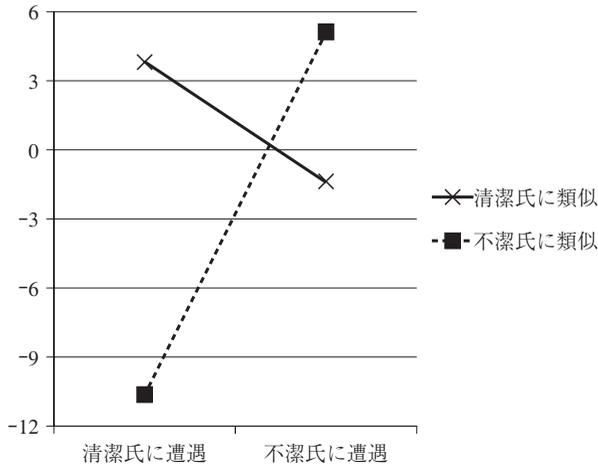
(4) 実験結果 2

この実験では、被験者と他者との類似性が被験者の自尊心に及ぼす影響に関する実験結果も追加的に報告されている。このために被験者は、面接室で遭遇した他者について、どの程度自分と似ていると感じたかを7点尺度（1点=まったく似ていない、7点=非常に似ている）で回答した。しかし2種類の他者（清潔氏/不潔氏）がどちらもかなり極端に設定されていたため、被験者によって認知された他者との主観的な類似性は、清潔条件・不潔条件を含めてほとんどばらつきがなく、全ての被験者と他者との間はほぼ等距離であったと Morse と Gergen は述べている (p. 151, 153)。またこのため、この研究では被験者が認知した主観的類似性が自尊心に及ぼした効果については報告されていない。

ただしこのようなことが予測されたためか、この実験では、実験を手伝った秘書にも各被験者と清潔氏および不潔氏との類似性を評定させている。その際秘書は、被験者と他者の類似度を姿勢、服装、清潔さ、マナー、外見全般、話し方、態度などから総合的に判断した。そしてこの結果として清潔氏に似ていると評定された被験者が37名、不潔氏に似ていると評定された被験者が41名となった。

第2図は、秘書によって評定された客観的類似性と他者要因とが自尊心の変化値に及ぼした影響を示している。清潔氏に客観的に類似して清潔氏に遭遇した被験者、および不潔氏に客観的に類似して不潔氏に遭遇した被験者は、ともに自尊心を高めていることがわかる。また清潔氏に客観的に類似して不潔氏に遭遇した被験者の自尊心にはほとんど変化がない。これに対して不潔氏に客観的に類似して清潔氏に遭遇した被験者は、明らかに大きく自尊心を低下させている。Morse と Gergen は、(客観的)類似性と他者要因との交互作用効果が有意であったと報告している ($F=6.32$, p

第2図 類似性と他者要因が自尊心に及ぼした影響



出所：(Morse and Gergen 1970), p. 154, Table 3 より作成

<.001)。

(5) 実験結果2が示唆すること

実験結果2は、きわめて奇妙な結果である。なぜなら、上に述べたように被験者が自ら評定した主観的類似性によれば、すべての被験者と他者とはほぼ等距離であったと Morse らは述べているからである。すなわちすべての被験者は、自分が清潔氏および不潔氏のどちらとも似ていない（あるいはどちらとも同程度に似ている）と評定している。にもかかわらず秘書が客観的に評定した類似性によれば、他者要因（遭遇した他者が清潔氏であったか不潔氏であったか）が自尊心に及ぼした影響は、被験者が清潔氏に似ていたか不潔氏に似ていたかではっきりと異なっていたのである。

この結果について Morse と Gergen は、「自分と似た他者が単にそこにいるだけでも、そのことによって自尊心が高まるのではないか」(p. 154) と考察している。しかし被験者が明示的に回答した清潔氏または不潔氏との心的距離は、全員がほぼ等距離だったのであるから、Morse らが述べるように

被験者が清潔氏または不潔氏に類似性を認知したとするなら、どちらに遭遇したとしても全員が同程度の類似性を認知したはずであり⁶⁾、全員が「自分と似た他者がそこにいる」状況を経験したはずである。したがって Morse らが述べるように「自分と似た他者が単にそこにいるだけでも、自尊心が高まる」のであれば、全員が同程度に自尊心を高めたはずであり、類似性と他者要因との交互作用効果は生じようがない。にもかかわらず、秘書が評定した客観的類似性と他者要因とは、図 2 に示すように明らかな交互作用効果を示しているのである。この結果をどのように理解すればよいだろうか。

問題を再度整理しよう。まず前提として、この実験では被験者が自ら評定した他者と自己との主観的類似性は、秘書が客観的に評定した両者間の客観的類似性とは異なっていた。その上でこの実験では、秘書が評定した客観的類似性と他者要因との交互作用効果が有意であった。すなわち被験者が認知した主観的類似性ではなく、秘書が認知した客観的類似性が被験者の自尊心に影響を及ぼしたのである。このことをどのように解釈すればよいだろうか。

この点に関して、秘書が認知した類似性が実際に被験者の自尊心に影響を及ぼしたとは考えにくい。この実験では秘書は被験者に手順を説明したり、書類を渡したり回収したりする役割を担っていたが、あらかじめ決められたシナリオに沿ってすべての被験者に等しく対応し、同じセリフを話した。したがって秘書が内心で認知した被験者と他者との類似性が秘書の態度に表明され、これが結果として被験者の自尊心に明確な影響を及ぼしたという可能性は排除することができるであろう。

また、被験者が回答した他者との類似性評定が虚偽であったとも考えにくい。被験者は実験中に清潔氏または不潔氏のどちらかと遭遇し、その他者と自己との類似性を回答したところ、その値が全員ほぼ等しかった。つまり清潔氏と遭遇し自分と似ていると感じた被験者が謙遜な気持ちから類似性を低

6) 秘書は清潔氏と不潔氏の両者と被験者を比較し、それぞれの被験者がどちらとより似ているかを評定することができたが、被験者は清潔氏または不潔氏のどちらかとしか会っていない。したがって被験者が類似度を評定できた他者は、割り当てられた実験条件で遭遇した他者 1 名であった。

く回答したり、不潔氏と遭遇した被験者がプライドを保つために類似性を実際に認知した値より低く回答したことはあり得るとしても、全員が示し合わせたようにほぼ等しい値を回答することは考えにくい。やはり Morse と Gergen が述べているように、この実験では清潔氏・不潔氏ともにかなり極端に設定されたため、全被験者が実際に認知した心理的距離は、ほぼ等しかったと考えてよいであろう。

このように、秘書の立ち振るまいが直接被験者の自尊心に影響を及ぼしたわけでもなく、被験者が類似度について虚偽の回答をしたわけでもないとなれば、この問題に関して可能な1つの説明として、以下のような解釈をせざるを得ないのではないだろうか。すなわち、(1) この実験で被験者が明示的に回答した類似性にはばらつきが見られなかったものの、意識下では各被験者は目の前の清潔氏または不潔氏と自分との類似性についてより詳しく評定を行い、明示的な回答とは異なる結論を得ていた、そして(2) そのような無自覚に認知した類似性が、他者要因との組み合わせにおいて被験者の自尊心に無自覚な交互作用効果をもたらした。このように解釈することによってしか、この実験結果を説明することはできないのではないだろうか。実験結果2をこのように解釈するとすれば、1970年に行われたこの実験では、社会的比較が自己評価が不明確ではない場合にも行われることが示されただけでなく、社会的比較が意識下で行われ、その結果が本人も気づかないうちに自己評価などに何らかの影響をもたらす可能性が示唆されていたとも考えることができる。

次章で述べるように、1990年代半ば以降社会的比較は本人の意志とは関係なく自動的に起動する過程であると考えられるようになってきている。しかしこれより約四半世紀先行して行われた Morse らの実験において、すでにこのことが示唆されていたと本稿では考える。

Ⅲ 社会的比較の自動性と二層比較

(1) 社会的比較の自動性

近年では、人々の思考や推論、感情は自動的に起動し、本人の意志によってコントロールすることはできない過程を含むと考えられるようになってきている⁷⁾。ここでもし、前章で検討したように社会的比較過程もまた自動的に起動する無自覚的な過程であるとするなら、社会的比較もまた何らかの対象（他者）を特定の次元において自己と比較することによって推論し判断するという意味で、一般的な判断プロセスや推論プロセスの一部として位置づけることができるかもしれない。実際に Kruglanski らは、社会的比較を他の一般的な推論プロセスの一種として捉えるべきであることを早い時期に提言している (Kruglanski and Mayseless 1990)。

(2) Gilbert らによる社会的比較の修正モデル

このような着想から、人が他者の行動から当該他者の性格やパーソナリティを推論する過程において見られる特徴が、社会的比較過程にも当てはまるかもしれないと考えたのが、Gilbert らであった。Gilbert らは、人間が他者の行動からその性格を推論する過程では、行動から直接内的属性を推論する「属性推論」の過程が先行して起動し、次いで当該他者を取り巻く状況要因を考慮して、先に推測した結果を修正する「状況による修正」の過程が行われると考えてきた (Gilbert and Malone 1995)。またこの枠組みでは、先行する属性推論の過程は、本人の意志に無関係に起動する自動的な過程であることが示唆されている。Gilbert はこのような枠組みを「修正モデル」と呼んでいる。そしてこのように先行する自動的過程による好ましくない効果が事後的に修正されるとするモデルが、社会的比較にもあてはまるのではないかと考えたのである。Gilbert らは、このような仮説（以後本稿ではこれを

7) 例えば (Bargh 2007) では、社会心理学の広範な研究領域において、当事者の自覚や意図を伴わない自動的・無意識的な心理過程が見られることが報告されている。

「社会的比較の修正モデル仮説」と呼ぶ)を1995年に行った2つの実験(Gilbert, Giesler and Morris 1995の実験1, 2)によって検証している。

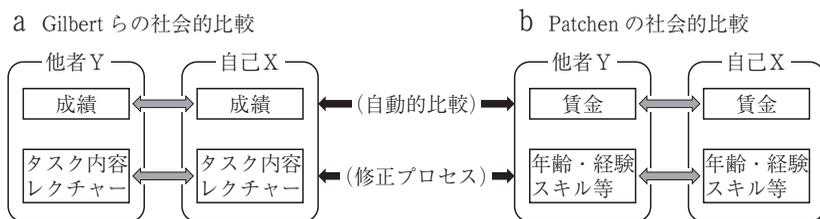
本稿ではこれら2つの実験について詳細に紹介する紙幅はないが、概略ではこれら2つの実験では被験者は写真の人物の表情識別などのタスクを遂行することを求められ、その終了直後に同時に参加した他者の成績を知らされる。他者の成績はいずれも被験者よりかなり良い。ただし他者が行ったタスクは、内容が被験者のものより容易だったり、あるいはコツを事前にレクチャーされていたりと被験者より有利な状況において行われたものであり、このことは被験者にも知らされている。したがって他者の成績を被験者の成績と直接比較することには、理論的に考えれば意味がない。このような設定において行われた Gilbert らの実験の結果は、被験者が他者の成績を知らされた直後に、意味がないにもかかわらず社会的比較が行われたこと、およびこれによって被験者の自己評定や自尊心が一時的に低下したことを示している。また被験者は、このような自己能力評定の低下や自尊心の低下を、タスクにおける自他の条件の差異(他者のタスクの方が易しいこと)を考慮することによって、後からプラス方向へ修正したことも実験の結果明らかにされている。

これらの実験は社会的比較の修正モデル仮説を強く支持している。すなわちこれら2つの実験は、(1)社会的比較過程とは、比較他者についての何らかの情報を得た瞬間に本人の意志とは関係なく自動的に起動するプロセスであること、(2)その結果は後から認知的に修正されること、の2点を明らかに示している。同時にこの実験は、Festinger 以来意図的かつ能動的なプロセスであると考えられてきた従来の社会的比較の理解に対して、再考を迫るものでもある。

(3) 社会的比較の修正モデルと二層比較

以上のように Gilbert らによる実験結果は、明らかにそれ以前に提示されてきた Festinger 以来の古典的研究に対して部分的な修正を迫るものである。しかしそれらは、完全に対立するものではないように思われる。

第3図 社会的比較過程の新旧の枠組み



Gilbert らの実験結果を、第 I 章で見た自他の賃金比較の例 (Patchen 1961) と較べてみよう。Patchen は、賃金に不満のある工場労働者は、同じ工場で働く他の工場労働者が支給されている賃金と自分の賃金を比較し、さらに当該他者の年齢や経験、スキルなどと自分のそれらを比較することによって、自分の賃金が適切か否かを判断するとした。その上で、「あらゆる社会的比較においては (中略)、同時に 2 つ以上の比較が行われる」(Patchen 1961, p. 138) と述べていた。Patchen が例示した社会的比較を図示したものが、第 3 図 b である。また同図 a は、上に検討した Gilbert らの実験において被験者が行った社会的比較を示す。

Patchen の例における工場労働者は、「賃金に関する不満を解消するため」または「自分の賃金水準が適正か否かを知るため」という意図をもって能動的に自他の賃金を比較するとされていた。しかしこの点に関しては、第 II 章で見た Morse らの実験および Gilbert らの実験結果を勘案するに、おそらく工場労働者は本人が意識するかどうかは別として、工場内で他者の賃金額を知った瞬間に、自動的に自他の賃金比較を起動していたと考えるべきであろう。そしてそのような自動的比較の結果、他の条件とは無関係に、比較他者の賃金の方が自分より多ければ不満になり、自分の賃金の方が他者より多ければ満足するのである。しかしその後、認知的に他者と自分の年齢や経験年数、スキルなどを考慮して、そのような自動的比較の結果を修正すると考えることができる。つまり Patchen が「賃金の不満を解消するため」、あるいは「適正賃金か否かを判断するため」と述べた本人の意志にもとづく過程は、実際

には自動的に起動する賃金比較の過程ではなく、後から作用する認知的修正の部分に関わっていると理解するべきではないだろうか。そして Gilbert らの枠組みにおける「修正」プロセスで参照された情報は、Patchen の枠組みでは「関連属性」と呼ばれていた情報に対応すると考えることができる。すなわち第3図 a, b において、上側の次元における比較が Gilbert らが示した自動的比較の過程（または二層比較の枠組みにおける比較したい内容そのもの）であり、下側の次元における比較が二層比較の枠組みにおける関連属性における比較、言い換えれば Gilbert らの枠組みでは修正プロセスに該当する。

このように再解釈するならば、Patchen が例示した古典的社会的比較の枠組みと Gilbert らの実験で示された修正モデルの枠組みとは、決定的に対立するものではない。むしろ Gilbert らが示した自動的比較と修正の枠組みは、古典的な社会的比較過程研究における二層比較の枠組みを、認知心理学的な観点を加味して再定義したものと理解することもできるように思われる。

IV 結語

本稿では、Gilbert らによる1995年の実験より四半世紀先行して行われた Morse らによる実験において、すでに社会的比較が本人の意志とは無関係に行われる自動的な過程であることが示唆されていたと考えられることを第二章で議論した。また第三章では、Gilbert らによる近年の自動的比較の枠組みが、Festinger 以来の古典的な社会的比較の枠組みと一面においては整合的に理解することが可能であるとする本稿の解釈を述べた。

これらの考察が示唆していることは、われわれは他者に関する何らかの情報が得られた瞬間に、本人の意志とは無関係に無自覚的に自他を比較するということである。そしてそのような自動的比較の結果として、他者が自己より優れているという結論がアウトプットされれば自己評価および自尊心が無自覚的に低下し、逆に自己が他者より優れているという結論がアウトプットされれば、自己評価および自尊心は無自覚的に高まる。また修正モデルが示

すところによれば、このような自己評価や自尊心の無自覚的な変化は、後から行われる処理により修正されるのである。ただし修正プロセスのどこまでが自動的な処理であり、どこからは本人の意志にもとづく処理であるのかは、今のところ明確には示されていない。

人間は他者の先行する経験を参照したり、あるいは単に他者とコミュニケーションを行う際に、何らかの属性に関する他者の情報に接触した瞬間に自動的に自他を比較する傾向があるという知見は、消費者行動研究およびマーケティング研究の観点からも有益な示唆を与える。さまざまな媒体を通じて他の消費者に関する何らかの情報が提供されると、消費者は当該他者と自己との比較過程を自動的に起動させるのである。その際にどのような情報がどのように呈示されると、どのような比較が起動し、それが事後的にどのように修正されるのかについて、さまざまに条件を変えて知見を蓄積していくことが求められる。特に重要な課題は、自動的比較からアウトプットされる暫定的な結果を、消費者がどのように保持あるいは修正し、最終的結論に至るのかという点である。この点については、別の機会に考察したい。

(筆者は東北大学大学院経済学研究科教授)

引用文献

- Bargh, J. A. (2007), *Social psychology and the unconscious: The automaticity of higher mental processes*, Bargh, J. A. ed., Psychology Press. (邦訳) 及川昌典・木村晴・北村英哉訳, 『無意識と社会心理学』, ナカニシヤ出版, 2009年.
- Festinger, L. (1954), "A theory of social comparison processes," *Human Relations*, Vol. 7, No. 2, pp. 117-140.
- Gilbert, D. T., Giesler, R. B. and Morris, K. A. (1995), "When comparisons arise," *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 69, No. 2, pp. 227-236.
- Gilbert, D. T. and Malone, P. S. (1995), "The correspondence bias," *Psychological Bulletin*, Vol. 117, No. 1, pp. 21-38.
- Goethals, G. R., and Darley, J. M. (1977), "Social comparison theory: An attributional approach," in Suls, J. M. and Miller, R. L. eds., *Social comparison processes: Theoretical and empirical perspectives*, Hemisphere, pp. 259-278.
- Goethals, G. R. and Nelson, R. E. (1973), "Similarity in the influence process: The belief-value distinction," *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 25, No. 1, pp. 117-122.

- Kruglanski, A. W. and Mayseless, O. (1990), "Classic and current social comparison research: Expanding the perspective," *Psychological Bulletin*, Vol. 108, No. 2, pp. 195-208.
- Morse, S. and Gargen, K. J. (1970), "Social comparison, self-consistency, and the concept of self," *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 16, No. 1, pp. 148-156.
- Patchen, M. (1961), "A conceptual framework and some empirical data regarding comparison of social rewards," *Sociometry*, Vol. 24, No. 2, pp. 136-156.
- Ueno, K. (2010), "Patterns of cross-orientation friendships in high school," *Social Science Research*, Vol. 39, No. 3, pp. 444-458.
- Vargas, N. and Loveland, M. T. (2011), "Befriending the 'other': Patterns of social ties between the religious and non-religious," *Sociological Perspectives*, Vol. 54, No. 4, pp. 713-731.
- Wheeler, L., Shaver, K. G., Jones, R. A., Goethals, G. R., Cooper, J., Robinson, J. E., Gruder, C. L. and Butzine, K. W. (1969), "Factors determining the choice of comparison other," *Journal of Experimental Social Psychology*, Vol. 5, No. 2, pp. 219-232.
- Wheeler, L. and Zuckerman, M. (1977), "Commentary," in Suls, J. M. and Miller, R. L. eds., *Social comparison processes: Theoretical and empirical perspectives*, Hemisphere, pp. 335-357.
- Wilson, S. R. (1973), "Ability evaluation and self-evaluation as types of social comparison," *Sociometry*, Vol. 36, No. 4, pp. 600-607.
- Wood, J. V. (1996), "What is social comparison and how should we study it?" *Personality and Social Psychology Bulletin*, Vol. 22, No. 5, pp. 520-537.
- 澁谷 覚 (2003), 「『似た他者』との比較を通じた意見形成：社会的比較過程理論—ネット・コミュニティ研究への視座」, 『季刊マーケティングジャーナル』, 第22巻, 第3号, 95-108頁.
- 高田利武 (1981), 「社会的比較過程理論における“類似性仮説”—その批判的検討 (1)」, 『群馬大学教育学部紀要 (人文・社会科学編)』, 第31巻, 275-290頁.
- 高田利武 (1982), 「社会的比較過程理論における“類似性仮説”—その批判的検討 (2)」, 『群馬大学教育学部紀要 (人文・社会科学編)』, 第32巻, 185-205頁.
- 高田利武 (1983), 「社会的比較過程理論における“類似性仮説”—その批判的検討 (3)」, 『群馬大学教育学部紀要 (人文・社会科学編)』, 第33巻, 271-287頁.
- 高田利武 (1984), 「社会的比較過程理論における“類似性仮説”—その批判的検討 (4)」, 『群馬大学教育学部紀要 (人文・社会科学編)』, 第34巻, 235-258頁.